Osaki Traditional crafts

大崎が誇る　伝統工芸

しの竹細工　鳴子こけし　鳴子漆器

岩出山しの竹細工

美しい網目と使いやすさで人気

柔軟で弾力がある「しの竹」の特徴を活かした製品。なめらかな表皮を内側に編みこむことで、手なじみも抜群。

300年の伝統に現代感覚を盛り込んで

岩出山の第4代城主・伊達村秦公が武士の手仕事として奨励したことに始まるしの竹細工。その職人として、また指導者として活動しているのが千葉さんだ。「しの竹細工は、竹の皮だけを使い、その表皮を内側にして編みこんでいくので使う人の手にやさしく、水切れもいいのが特徴。それだけに、手間の多さも相当なもの。かつては2000人以上いた職人も、今では50人ほどになってしまいました。しかし、現代の様式に取り入れやすい商品の開発も進み、今では遠くから技術を学びに来る人も多くなりました。新しい職人を育てるとともに、"遺す（のこす）"のではなく、"発展させる"、伝統のありかたを考えていきたいですね」。

鳴子漆器

しっとりとした手触りに幅広い用途

塗りは木目を生かした木地呂塗やふき漆仕上げ、また独特の墨流しの技法である竜文塗などがある。上品な光沢と堅固さが魅力。

「用の美」を極めた鳴子漆器の真髄

今から約380年前、伊達政宗公の命により始まったと伝えられる鳴子漆器。その職人の中でも50以上の塗りの技術を持ち、数々の賞を受賞している後藤さんは、現代の鳴子の塗り師の代表的存在だ。「鳴子漆器は、日常の生活用品。だから、自分の手になじむものを選んで長く使ってほしい。最初から漆だけを塗り重ねる塗り物だから素朴に思えるけれど、その分しっかりした技術と手間が必要。絶対に手抜きをしないで、いつも静かな気持ちで塗りの作業自体と対面する。それが私の信条です」。時とともに磨かれ、光沢を増してゆく鳴子漆器の中に、職人としての魂を見る思いだ。

鳴子伝統こけし

華やかさと可憐さに満ちたデザイン

首を回すと鳴る「キュッキュッ」という音が特徴。胴に描かれる模様は「重ね菊」といい、横から見た菊の姿を重ねて描くものが代表的。

鳴子こけしの愛らしさに秘めた職人技

江戸時代、お椀やお盆を挽く木地師が、子供のための玩具として作り与えたのが始まりとされているこけし。「こけしの首の部分はロクロを回しながら、一気にはめ込む。"キュッキュッ"と鳴る鳴子こけしの特徴は、この首入れの技術あってのものです」。鳴子伝統こけしの第一人者・菅原さんが、そう言いながら実演してみせてくれる。素材となる「ミズキ」を秋口から伐採し、1年間寝かせて乾燥。ロクロを回しながら削り、描彩、蝋仕上げまで、全く気を抜けない作業の連続だ。「買われた方に、子供を見るような気持ちで大事にしてもらえるように、と思っているんです。だから、顔のいのちである眼を描く時にはいまだに緊張します」。かわいらしい姿に秘められた技と心が、長く愛される理由なのだ。

■後藤漆工房（ごとううるしこうぼう）

■住所／大崎市鳴子温泉字新屋敷122-2　■電話／0229-83-3628

■瀾 漆工房（らんうるしこうぼう）

信頼される漆器を生む伝統技術

漆一筋50年以上の職人小野寺公夫さんは、使いやすく長持ちする漆器を作るため、決して手を抜かない。その手で生み出された漆器は、使い続けることで魅力が増す。

■住所／大崎市鳴子温泉字上ノ原98-3
■電話／0229-84-6544

■佐藤漆工房（さとううるしこうぼう）

漆の魅了を最大限に伝える工房

"安心して使える漆器"を心がけ、職人が一つひとつ丁寧に制作した鳴子漆器が並ぶ。『ギャラリー漆木舎』も併設。

■住所／大崎市鳴子温泉字南原200　■電話／0229-87-2361
■営業時間／9:30～17:00　■休／不定休（電話にて要確認）
■HP／http://urushigoya. com/